

[外国語]

外国語活動におけるチャレンジタイム導入の効果

茂木 淳子*

1. 研究の背景

平成23年度より、小学校における外国語活動が本格的にスタートした。保護者の関心と期待は高いが（北條，2003；牧野，2008），小学校教員には，不安感がつきまとう（樋口，2010；日本教育新聞，2009）。実際に，外国語活動の環境や条件整備に関して，問題は山積しているといっても過言ではない（旺文社英語教育研究室，2009）。

そんな中，必修化となった外国語活動の指導に当たっては，英語ノートを持ち所とする教員が多い。ベネッセの調査（2011）では，教師が外国語活動で使用する教材のうちの89.6%を「英語ノート」が占めている。英語ノートには，長所と短所がある。長所としては，「聞き，話す活動の体験を通して，コミュニケーションへの意欲を高め，ことばへの気付きとともに理解力・発信力の素地を養う教材」となり得ることがあげられる。一方，短所としては，「指導案のレベルが高く，担任に指導上のかなりの負担がかかる」ことや，『英語ノート2』については，言語材料が過密であることが指摘されている（高橋，2010）。レディネスが不十分であるのにアウトプットの活動が設定されていることで，失敗体験から英語嫌いになることを高橋（2010）は懸念している。また，英語ノートを教科書代わりに扱うだけでは，児童の関心を喚起し，持続することは難しいとの見方もある（人見他，2010）。

確かに，6年生になると5年生ほど「英語の授業が好き」ではなく，「英語の授業に進んで参加している」わけでもない（国立教育政策研究所，2009）。これはあくまでも，研究協力校53校の集計結果であり，一般化することはできないが，外国語活動にある程度の力を入れている学校でさえ，6年生になると意欲が低下するという事実は，特筆に値する。これは，英語ノートの短所によるものではない可能性がある。実際に指導する教師が，レディネス不十分のままアウトプットを強要するとは考えにくいからである。また，児童の興味・関心を考慮したり，言語材料が過密にならないよう配慮したりしても，6年生の意欲は低下してしまうことが明らかになっている（茂木，2011）。

では，どのようにしたら，6年生の意欲を損なうことなく外国語活動を進めることができるのだろうか。高島（2006）は，児童の主体性を引き出すことが重要であり，プロジェクト型カリキュラムが有効であるとしている。また，このプロジェクト型外国語活動では，「課題を解決するというゴールがあることで，児童は明確な目的意識をもち，活動を進め，活動への興味を持続できる」と述べている（高島，2009，p68.）。また，横田（2010）は，児童と外国語活動を創っていくことを推奨している。児童自身が何を話したいか，何をテーマにしたいかを決定し，それをするということの意味が児童の手の内にあるかどうか，ポイントであるとしている。つまり，児童に主体性をもたせることで達成感や充実感が期待できるとしている。

2. 研究の目的

本実践では，外国語活動において，児童に主体性をもたせた「チャレンジタイム」という課題（タスク）を設定することにより，高学年児童の意識にどのような変容をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 活動実施時期：2010年9月から2010年12月まで

(2) 参加者：5年生2クラス52名，6年生2クラス58名，計110名。なお，2010年度には外国語活動を年間35時間，実施した。

* 上越市立大手町小学校

(3) 指導体制：英語担当教師とALTとのチームティーチング

(4) 活動計画

まず、「学期の終わりにALTと1対1で、英語でのコミュニケーションの時間を設定する」という課題（タスク）を与えた。この課題を「チャレンジタイム」とし、それまでの10数時間をどのようにしたいか、ALTとの会話のための準備期間として、どんな英語表現を学びたいかを話し合わせた。5年生2クラス、6年生2クラスともに、同じような意見が出されたため、5、6年共通の活動計画を表1のように定めた。なお、活動計画の作成に当たっては、東野・高島（2007）に示された、「プロジェクト型カリキュラム作成の視点」を参考にした。

表1 活動計画（全14時間）

内 容	時数	英語ノートとの関連
① 活動計画を立てよう	1	
② 好きな食べ物は？	3	英語ノート1：Lesson 9 「ランチ・メニューを作ろう」
③ 好きなスポーツは？	1	英語ノート1：Lesson 4 「自己紹介をしよう」
④ 好きな動物は？	1	英語ノート1：Lesson 4 「自己紹介をしよう」
⑤ 好きな教科は？	3	英語ノート1：Lesson 8 「時間割を作ろう」
⑥ こんなことができる？	3	英語ノート2：Lesson 4 「できることを紹介しよう」
⑦ チャレンジタイムの準備をしよう	1	
⑧ Let's enjoy チャレンジタイム	1	

(5) 活動例 「⑤ 好きな教科は？」 3／3時間目の展開

1 ねらい：英語を使って友だちとかかわり、自分のオリジナル時間割をつくろうとする。

2 本時の展開

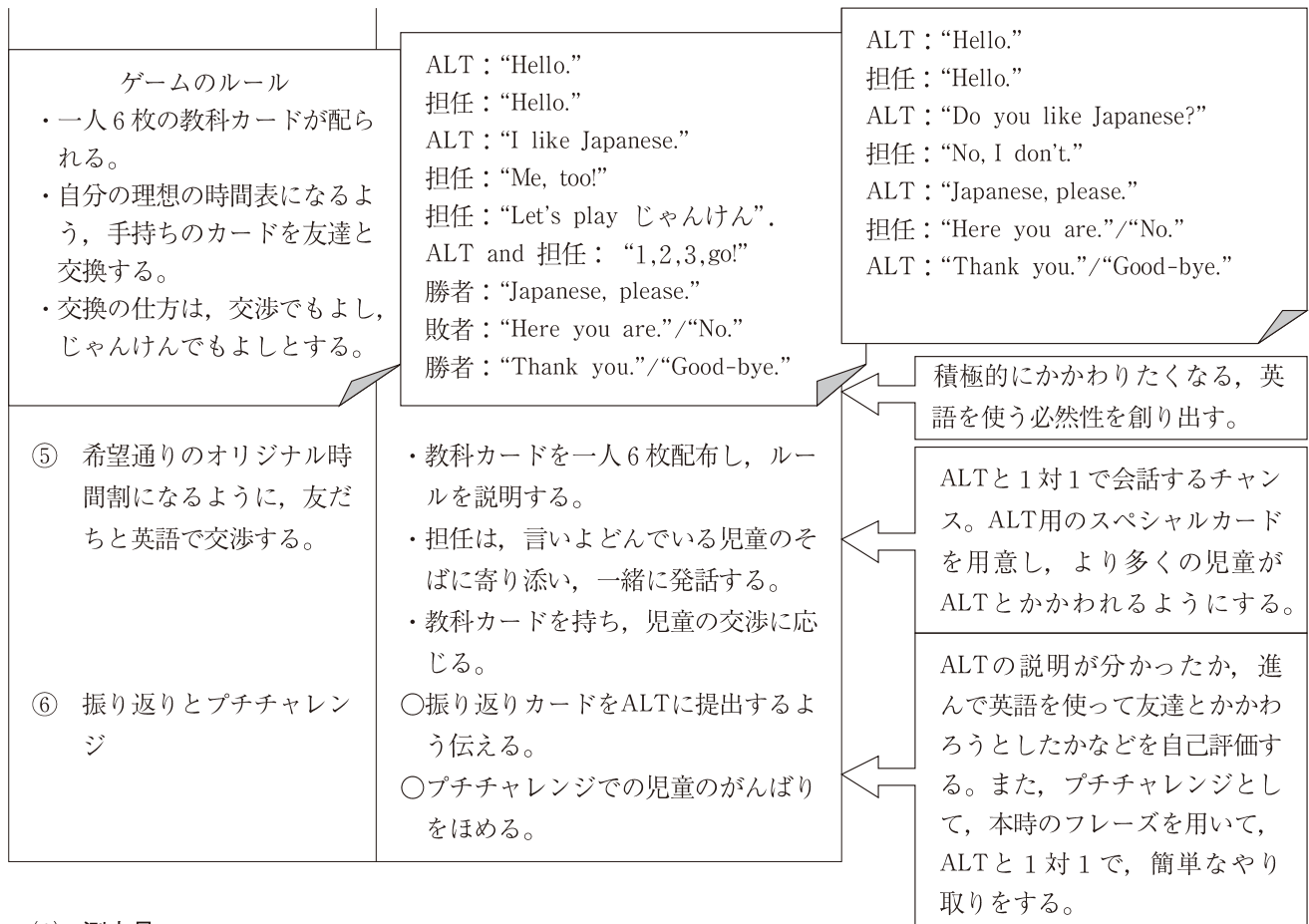
学習活動	担任・ALTの働きかけ	指導のポイント
① あいさつをする。 ② 教科の言い方を練習したり、曜日の歌を歌ったりする。 ③ 理想の時間割をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> あいさつをする。 リズムを使い、テンポよく進める。 教科や曜日の発音を聞かせる。 理想の時間割を記入するシートを配布する。 何をどのように記入するのかをALTが英語で説明する。 	<p>担任主導でスタート！</p> <p>担任が英語を使う手本となり、大きな声でしっかりと発音することで、英語特有のリズムに慣れる。</p>
④ 担任とALTの会話を聞き取るとともに、ゲームのルールを知る。	<ul style="list-style-type: none"> 担任とALTで、デモンストレーションをする。 	<p>ALTの英語を翻訳しない。与えられたシートやその場の状況から推測し、自力で判断する力を養う。</p>
		<p>授業の前にALTの発音チェックを受け、正しい英語を使うよう心がける。</p>

理想の時間割を作ろう

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目
理想	体	理			
現実					

○ × ○ × ○ × ○ × ○ ×

あなたの強運度 %



(6) 測定具

- ① ARCS動機づけモデル (Keller, 1992) に基づく5段階形式 (5: はい, 4: 少しはい, 3: どちらでもない, 2: 少しいいえ, 1: いいえ) の6項目からなるアンケート
- ② 外国語活動に関する意識調査: 下記の3項目からなる5段階形式 (5: はい, 4: 少しはい, 3: どちらでもない, 2: 少しいいえ, 1: いいえ) のアンケート。質問1: 英語を話せるようになりたいですか。質問2: 英語を勉強するのは楽しみですか。質問3: 英語の授業に積極的に参加していますか。
- ③ 外国語活動に関する自由記述

(7) 分析方法: χ^2 検定, 分散分析

4. 研究の結果

(1) ARCS動機づけモデルに基づく本実践の児童評価

本実践が、児童にとって興味・関心をもてるものであったかどうか、学習者評価を得るため、ARCS動機づけモデルに基づく5段階尺度による6項目の事後アンケート調査を実施した。その結果は、表2, 3に示す通りである。

表2, 3から、各項目の平均値は、項目4以外は、4.1から4.7の範囲にあり、この活動について、児童から好意的な反応を得られたと考えられる。さらに、学習者の意識をより明確にするため5段階尺度形式を「肯定的」「中立」「否定的」の3段階に変換し、再集計した上で χ^2 検定を行った。その結果、すべての項目において、1%水準で有意であった。さらに、「肯定的」「中立」「否定的」の3者間に対するライアンの名義水準による多重比較によると、中立・否定的な回答をする児童より、肯定的な回答をした児童数の方が多かった。よって、5, 6年生にとって、全体的に見て、「おもしろく」「やりがいがあり」「挑戦的で」「満足感が得られ」「またやってみたい」ような外国語活動であったといえる。

表2 ARCS理論による項目の集計結果：5年生（N=52）

項目内容	5段階尺度数を3段階尺度に変換し 集計した結果				3段階尺度数に対する χ^2 検定結果		
	M	肯定	中立	否定	$\chi^2(2)$	p	ライアンの名義水準による 多重比較5%水準
1 おもしろかった	4.71	49	0	3	87.04	**	肯定的>中立≡否定
2 やりがいがあった	4.60	49	2	1	86.81	**	肯定的>中立≡否定
3 挑戦的	4.35	45	4	3	66.27	**	肯定的>中立≡否定
4 自信がついた	3.77	32	12	8	19.08	**	肯定的>中立≡否定
5 満足感が得られた	4.38	45	5	2	66.50	**	肯定的>中立≡否定
6 またやってみよう	4.56	49	0	3	87.04	**	肯定的>中立≡否定

** $p<.01$

表3 ARCS理論による項目の集計結果：6年生（N=58）

項目内容	5段階尺度数を3段階尺度に変換し 集計した結果				3段階尺度数に対する χ^2 検定結果		
	M	肯定	中立	否定	$\chi^2(2)$	p	ライアンの名義水準による 多重比較5%水準
1 おもしろかった	4.78	57	0	1	110.10	**	肯定的>中立≡否定
2 やりがいがあった	4.53	54	3	1	93.35	**	肯定的>中立≡否定
3 挑戦的	4.19	50	5	3	73.07	**	肯定的>中立≡否定
4 自信がついた	3.71	37	16	5	27.35	**	肯定的>中立>否定
5 満足感が得られた	4.41	53	3	2	87.97	**	肯定的>中立≡否定
6 またやってみよう	4.57	54	1	3	93.35	**	肯定的>中立≡否定

** $p<.01$

(2) 外国語活動に対する意識

5, 6年生児童の事前と事後における各項目の意識の変容を比較した。5段階尺度による3項目の回答結果を集計し、平均(M)と標準偏差(SD)を求め、以下の表4に示した。

「学年×事前・事後」の分散分析を行った結果、項目1「英語が使えるようになりたいですか」では、学年の違い(有意傾向)が見られた($F(1,108)=3.24$, $p<.1$)。そこで、学年ごとに事前事後の比較をしたところ、どちらの学年も、事前と事後の平均に有意差はなかった。(5年生 $F(1,51)=1.40$, ns ; 6年生 $F(1,57)=1.24$, ns)

項目2「英語が好きですか」、項目3「外国語活動に進んで参加していますか」の2項目では、事前・事後の主効果が有意傾向(項目2 $F(1,108)=2.80$, $p<.1$; 項目3 $F(1,108)=3.59$, $p<.1$)を示した。いずれも、事前より事後の平均が上回っていた。

表4から、どの項目においても事前事後の平均値が、4以上と非常に高い数値を示している。どちらの学年もこの3項目に対して肯定的な評価をし、維持したことを示している。

表4 外国語活動に対する意識の集計結果

項目内容	5年生 (N=52)				6年生 (N=58)			
	事前		事後		事前		事後	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1 使えるように	4.81	0.48	4.65	0.90	4.41	1.03	4.55	0.87
2 英語が好き	4.31	0.84	4.52	0.84	4.43	0.83	4.55	0.77
3 進んで参加	4.17	0.89	4.48	1.01	4.33	0.86	4.45	1.00

(3) チャレンジタイムについての自由記述から

チャレンジタイム後に書いた自由記述の中で、5年生では52人中12人が、6年生では58人中8人が、「失敗した」「間違えた」「うまくいかなかった」と記述している。そこで、その20人のデータを再度、分散分析した。

いずれの項目においても、有意差はみられなかった。チャレンジタイムを「失敗した」と感じて、そのために外国

語活動に対する意欲が減退することはなかった。

表5 失敗した児童の外国語活動に対する意識の集計結果と分散分析結果

5, 6年生 (N=20) 項目内容	事前		事後		F(1,19)	p
	M	SD	M	SD		
1 使えるように	4.95	0.22	4.85	0.65	0.38	ns
2 英語が好き	4.45	0.67	4.55	0.92	0.13	ns
3 進んで参加	4.35	0.79	4.30	1.23	0.02	ns

5. 考察

これまでの結果から、この活動は、児童にとって十分満足できるプログラムであったといえる。また、それ故に、6年生の「英語が好き」「積極的に取り組んでいる」という意識は低下することがなかった。主体的に活動に取り組むことで、達成感や充実感が得られ、この経験が次の活動への意欲となり、好循環を生み出しているといえる。また、5年生も同様の結果を得ており、5年生にとっても、有効な方法であることが明らかになった。

今回の活動計画では、児童自身が使ってみたい英語表現をたくさん採用したため、インプットや練習の時間が短くなってしまったという問題点があった。しかし、表5に示した通り、何らかの理由によりチャレンジタイムに失敗した児童であっても、外国語活動に対する意欲を減退させる理由にはなっていない。少しばかりチャレンジングな内容であるにもかかわらず、児童が主体的に活動している場合には、多少のインプット不足や練習不足があっても、不安の要素にならないことを示している。むしろ、オウム返しに発音する、少し慣れたら、自分で使ってみるというように積極的にアウトプットの機会を与えることで次のような姿が見られた。

〈相手を見つけて、お互いにインタビューし合う場で〉

児童A：「Do you like … Do you like … . えーっと、『社会』ってなんだっけ？」

児童B：「social studies」

児童A：「あ、そうだ。それぞれ。Do you like social studies?」

児童B：「Yes, I do.」

インプット不足、練習不足を児童相互のやり取りで補充している。協同の学びがそこにある。小学生にとって言語材料が過密すぎるかどうかは、単語数や練習に費やした時間で決まるのではない。活動を楽しみ、夢中になっている児童は助け合い、思わぬ力を発揮する。このことが、児童Cの記述から読み取れる。

児童C：外国語活動は、覚えることがいっぱいあってたいへん。でも、いい。楽しいから。

一方、今回のチャレンジタイムでは、5年生では52人中12人が、6年生では58人中8人が、「失敗した」「間違えた」「うまくいかなかった」と記述している。児童Dは、活動後の自由記述に次のように記している。

私が、ALTの先生に

“What sports do you like?”

と英語で質問したら、先生は笑って、

“Yes, yes, yes.”

で終わってしまいました。何て聞こえたのかな？3学期も、また、チャレンジタイムをしたいです。

そのときには、ちゃんと通じるように、がんばりたいです。

児童Dのチャレンジタイムは、「失敗」であった。にもかかわらず、児童Dの各アンケート項目の評価は、下がることがなかった。同様に、それ以外の児童も、チャレンジタイムの失敗によって英語嫌いになることはなかった。その理

由は、児童Eの記述に表れている。

チャレンジタイムは、少しドキドキしたけど、わくわくの方が多かった。言いたいことが言えなくなったりした。でも、聞きたいことが聞けてよかった。ALTの先生は、生の魚に慣れていないと思ったら、意外に、スシも食べられると言っていた。いろんなことを聞けてよかった。たいへんだったけど、やり切った感じが出た。次こそは、しっかり言いたい。分からない言葉も覚えて、いろんなことを聞きたい。

結果としては、チャレンジタイムが失敗に終わったかもしれないが、それまでの協同の学びの中に、確かな手ごたえを感じ、「もっと、こうしたい」という探究心が芽生えていることが分かる。

本実践では、児童に「一人で1分間、ALTの先生と英語で会話する」という課題（タスク）を与えた。そのゴールに向けて自分たちで考え出した活動計画をもとに、14時間の外国語活動を組み、ペア学習やグループ学習などを通して、協同の学びを深めていった。その結果、最終的な課題（タスク）の成否にかかわらず、満足感を得ることができ、コミュニケーションの楽しさを味わうことができたといえよう。

6. 今後の課題

本研究で児童に与えた課題、「一人で1分間、ALTの先生と英語で会話」のように、学級担任が無理なく取り組み、かつ、児童が主体的・積極的に参加し、外国語活動に対する意欲を高める活動の開発がさらに必要であると考えられる。

引用文献

- 国立教育政策研究所（2009）.「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」
- 高島英幸（2006）.「英語科に求められる教師の力量形成とは」 田中耕治（編）『カリキュラムをつくる教師の力量形成』東京：教育開発研究所 68-71.
- （2009）.「小学校外国語活動はプロジェクト型で！」『英語教育』58(2), 67-69.
- 高橋一幸（2010）.「小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言」 樋口忠彦（編）東京：研究社 45-52.
- 日本教育新聞（2009）. 7月13日
- 東野裕子・高島英幸（2007）.『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』東京：高陵社書店
- 樋口忠彦（編）（2010）.『小学校英語教育の展開』東京：研究社.
- 人見徹他（2010）.「小学校外国語活動の今後を考える—求められる授業内容とは何か」『教職研修』38(12), 108-111.
- ベネッセ（2011）.『第2回 小学校英語に関する基本調査（教員調査）』
- 北條礼子・松崎邦守（2003）.「小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査：山梨県I中学校の場合」『上越教育大学研究紀要』23(1), 1-10.
- 牧野真貴（2008）.「小学校英語活動に対する保護者の意識調査」『コミュニケーション研究叢書』6, 59-73.
- 松宮奈賀子（2006）.「児童が好む活動に関する意識調査：不安の強さに焦点をあてて」『日本児童英語教育学会研究紀要』25, 89-103.
- 茂木淳子（2011）.「英語ノートを活用した外国語活動の工夫と高学年児童の意識への影響」『教育実践研究』21, 197-202
- 横田玲子（2010）.「子どもを表現者として育てるプロジェクト型外国語活動」『聖学院大学小学校英語指導者養成講座配布資料』
- Keller, J.M. (1992). Enhancing the motivation to learn: Origins and applications of the ARCS model. *Reports from The Institute of Education Tohoku Gakuin University*, 11, 45-67.